

合同企画展「龍大生が語る 京都の町と祈り」を通して(2) 一醍醐寺町石一

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



醍醐寺三十一町石

鎌倉時代に建てられた町石のうち、唯一完全な形で残っているものです。このような、方柱と笠からなる石造物を「笠塔婆」と呼びます。笠が力強く反ることが、鎌倉時代の町石の特徴です。



醍醐寺三十七町石

江戸時代に再建された町石です。台石の上に建っていたり、「大日如来」銘の下に蓮華が彫られていたり、他の町石よりも少し豪華な造りになっています。江戸時代の町石は、笠が丸みを帯びることが特徴です。

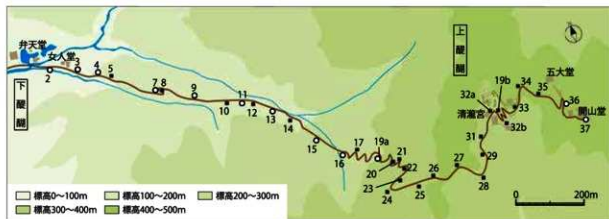
はじめに 2018年度京都市考古資料館・龍谷大学合同企画展「龍大生が語る 京都の町と祈りー東市、七条町、醍醐寺ー」Ⅱ部では、醍醐寺町石について展示を行ないました。

醍醐寺(京都市伏見区)は、貞観16年(874)に空海の孫弟子で

ある理源大師聖堂(まげだいらいしやうだう)によって創建された真言宗醍醐派の総本山です。醍醐寺には2つのエリアがあり、麓の下醍醐から醍醐山(標高450m)山頂付近の上醍醐へは、全長約2km、歩いて1時間ほどの山道を登ります。この山道に沿って立ち並ぶのが、今回ご紹介する醍醐

寺町石です。

町石とは 町石(町石卒まちいし部ぶ)は、石で造られた道標(みちしるし)の一種です。おおよそ一町(約109m)ごとに建てられたことからこの名で呼ばれます。仏教信仰に基づくもので、主に山岳寺院において建てられました。このような道標は、



凡例：■は鎌倉時代の町石を、○は江戸時代の町石を表す。数字は町数を表す（例：2＝二町石。一・六・十八町石は所在不明。十九町石と三十二町石はそれぞれ2基現存する。

醍醐寺町石マップ

平安時代中期以降、霊場信仰の隆盛による参詣者の増加に伴って造られるようになりました。当初は木造で「町卒都婆」と呼ばれましたが、鎌倉時代以降は恒久性のある石で造られるようになり、町石と呼ばれるようになりました。

高野山町石 町石のうち、最も大規模かつ当初の姿をよく残すものが、和歌山県の高野山町石です。造立当時の願文が現存し、文永2年（1265）に高野山遍照光院の僧覚教により発願されたことがわかっています。いずれも花崗岩製で、五輪塔の型式で造られています。正面に刻まれた梵字から、山上三十六町（宝塔～奥之院弘法大師御廟）は金剛界三十七尊（大日如来を除く）を、山下百八十町（宝塔～慈尊院）は胎藏界百八十尊を表していると考えられます。寄進者には僧侶や武家など多様な人物の名が見られ、醍醐寺の僧侶の名も確認できます。後醍醐上皇も4基寄進しており、高野山町石の重要性の高さがうかがえます。

醍醐寺町石 醍醐寺町石は、全三十七町のうち35基が現存しています。すべて花崗岩製で、笠塔婆

の型式で造られています。塔身正面に金剛界三十七尊の梵字・名前と町数が、左右側面に寄進者名や紀年銘が刻まれます。

造立年代は、鎌倉時代のもので、江戸時代に再建されたものとに分かれます。江戸時代の町石には紀年銘があり、寛永11年（1634）または同18年の造立であることがわかりますが、鎌倉時代の町石には紀年銘がなく、明確な造立年はわかりません。醍醐寺町石には願文も残っていませんが、『醍醐寺文書』の中の「醍醐寺西坂表町石之次第」という文書によれば、現在は所在不明の一町石に「文永九年三月日／勸進僧入信／座主権僧正」と書かれていたといえます。寄進者の活動年代からみても、おおよそ文永9年（1272）頃の造立と考えられます。また、「座主権僧正」銘があることから、当時の座主である37世定済が造立を主導した可能性が指摘できます。寄進者には醍醐寺の高僧のみならず下級僧侶の結衆も名を連ね、町石造立が当時の醍醐寺を挙げての一大プロジェクトであったことがうかがえます。

醍醐寺町石は高野山町石と造立時期が近いことから、その影響を受けて造立されたと考えられています。醍醐寺町石は37基それぞれが金剛界三十七尊を表していますが、これは高野山の山上三十六町にならったものと考えられます。醍醐寺町石の場合は最後の三十七町石が大日如来を表しており、町石自体が金剛界曼荼羅の世界を再現しているといえます。町石は参詣者を上醍醐へ導くとともに仏の世界へと導く存在であり、人々の祈りの対象だったのです。

まとめにかえて 鎌倉時代から700年以上にわたって人々が祈りをつなぎ守ってきた醍醐寺町石と町石道ですが、2018年9月に発生した台風21号により被害を受けました。野外にある町石のような石造物は、天災によるダメージを受けやすい存在です。災害の多発する今、私たちがこれらをどのように未来へとつないでいくかが問われています。まずは本稿が、ひとりでも多くの方が町石道を訪れる契機となれば幸いです。

（龍谷大学大学院 吉兼千陽）